
レイティピア

Sell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイティビア

【コード】

N9429N

【作者名】

Sell

【あらすじ】

学校でいじめられていた少年。

彼はマンションから飛び降りたと思っていたが、異世界へ飛ばされてしまう。その世界の名は、レイティビア。

昔、最強と謳われていた魔導士の強大な魔術により、本来一つだった世界が、6つに分けられてしまう。

この話は、何でもありの魔法メインのファンタジー！！

1章 分離し世界（前書き）

学生が書いているので、意味不明なところがあったら、指摘御願います。

1章 分離し世界

プロローグ

この世界には、300年前に、ある魔導師の術で分離し、生まれた世界があった。

その世界の名は、レイティビア。

剣などの武器が当たり前のようにあって、モンスターが棲息している……そして何より魔法が主流となっている世界である。

しかし、現実世界から、この異世界に来るためには、

「寝る」

という行為が必要だった。

しかし、生半可な「寝る」ではない。

昏睡……ほとんど死人のような眠りに落ちなければ、この世界にはこれない。

それに、誰しも来れる訳ではない。

心に深い闇……強いトラウマがある人間のみが、くる事が出来る世界である。

2章 異世界

その少年は、マンションの屋上に立っていた。

高校1年生で、卑劣なイジメを受け、希望を失い、自殺しようとマンションの柵の向こうに立っていた。

「もう、誰も僕なんか必要としないんだ。もう、僕なんて生きる意味なんてない。死のう……………」

少年は、自分の家の部屋に遺書を残し、深夜の3時に屋上へ来ていた。

10階建てのマンションから、少年は飛び降りる……………

涙なんて、毎日のように流し、とうに枯渴していると思ったのだが、死が直面しているからなのか、自然と涙が出る……………

「ゴメン・・・母さん、父さん」

そして、少年は激しい痛みを感じ、視界が真っ黒になった瞬間に、何も感じなくなり……………意識を失った。

「……………」

少年は、目を覚ました。

目の前には、真っ暗……………ただひたすらの闇だった。

目の前には、猫と人間が合成されたような物が立っていた。

しかし、感情が歪んでいるせいか、何も感じる事はなかった。

「アナタは、3人目の異界来者よ。よくまあ、こんな世界に来ようと思ったことだね。コレは、レイティビアのカントサウスリー。平和な町よ。」

少年が下を見ると、人間とは思えないような、獣のような物ばかりが道路を歩いていた。

「……………僕……………飛んでるのか……………」

「いいえ。今は、ヴィジョンよ。」

獣と人間の合成体が指を鳴らすと、景色は真っ黒に変わる。

闇の中、立っているのは自分と獣と人間の合成体だけだった。

「あ、申し送れたわ。私の名前はレビル。獣族よ。ああ。デフォルトは人間の姿だから」

「……………?」

少年は、このレビルと名乗る者の言っている意味がさっぱり解らなかった。

「カントサウスリーの東部に、心鏡屋という店があるわ。そこで装備を揃えなさい。」

「……………?」

困惑している少年をよそに、レベルは続ける。

「この世界には、大まかに分ければ3つの戦闘タイプが存在しているの。剣、魔法、弓。まあ、ブロンズランクになったら、適性テストがあるからがんばってね。……まあでもこの世界に行けるか否かはキミの秘めたる力にかかっている。」

再びレベルが指を鳴らすと、真っ黒の景色に、ぼんやりした灰色の物体が見えたかと思うと、どんどんそれははつきりとした形になり、最終的には3つの扉になった。

「自分が行くべき『道』を選びなさい。」

「な……………なに、これ?」

「これは、真実の扉。冒険に出るにふさわしいかどうかを見極めるため使う物よ。」

少年は、真ん中のドアが手招きしているように感じ、おそろおそろ真ん中の扉のドアノブに触れた瞬間……………

バチツツ！！！！！！！

鋭い痛みを感じると思うと、視界がゆらゆらと揺らめき、身体がドアに吸い込まれるような……そんな感覚が身体を突き抜けた。

「おめでとう………」

レビルが何か言っている……しかし、少年に聞こえるはずはなかった。

「ん……おれ………」

少年は、ゆっくりと立ち上がり、周りを見渡した。

「草………原??？」

東の方には、大河が勇ましく流れていて、西には静寂で広大な森。北には威圧感が漂う巨大な山脈が連なっていた。

南は………町。

もしかしたら、あれがレビルの言っていたカントサウスリーなのかも知れない。

「行って………見よう………」

少年は、足を踏み出そうとしたが……

「やめよう………こんなの………無意味じゃないか。僕は死んだはずなの………に。」

少年は、奇怪な事に気がついた。

「あれ??」

自殺に踏み込んだ記憶はあるのだが、実際に死んだのかわからない。てっきり、ココは死の世界だと思っていたのだが、死んだ記憶がない。

「まあいいや……そうだ、あの川に行って、水におぼれれば……」

と、川に向かって足を少し進めた瞬間……

変な、粒のような……昆虫のような……鳥のような……獣の
ような……

形を変えて、そこに立っていたものは……

「グルオオオ！」

ゴリラのようなでかい怪物となった。

「う……わ……なんだ、こいつ……」

少年は、余りにも激しい恐怖を前に、足がくすんで動けずにいた。

「なっ……なんなんだよっ、こっこれっ!……」

ゴリラは、腕を振り上げ……………

気づけば、身体のすぐ横を腕は通過して、地面が隆起するほどの威力のアームハンマーのような……………

それは少年には見えなかった。

余りにももの速さで、今の少年が目視することは不可能。

そしてゴリラは再び振りかぶり……………

強烈なパンチが、少年を遠方へ吹き飛ばし……………

死のイメージは、くつきりと脳内で完成していた。

少年は、目を硬く閉じ、死への恐怖を感じていた。

自分の感情に疑問を感じる前に、目をうつすら開くと、ゴリラからかなり遠くに離れていた。

「え??？」

「おまえ々なんでこんな危険区域に入ってたんだよ。ここはシルバーランク以上の奴が入る区域だぜ。見たところ、お前装備もしてないし。ランクも取得していなさそうだしな。」

少年の後ろから、声が聞こえる。

後ろを振り向くと、そいつは、鳥と狼を混ぜたような……………

そんな奇怪な姿だった。

3章 イジメ(前書き)

151

3章 イジメ

少年はゴリラの方を見る。

依然として、殺気漲る表情でこちらを見ている。

「俺は、バースつつうんだ。お前は？………」

「グルアアー!!」

ゴリラは猛スピードで二人に近づき腕を振りかぶり、パンチを繰り出す。

バースは、避けるために羽根に意識を集中したが、少年は一向に逃げようとしない。

「ちよっ！お前！」

バースは、少年の首をすつと持ち、パンチをかわしつつ空高くに飛んだ。

そして、大きなため息の後、少年に問うた。

「お前の名前とくなんで避けなかったか理由を教えるく」

「離してください!!死なせてください!!」

「……………いやだね。」

「だったら……」

少年は俯きながら、自分を殺すようにお願いした。

バースは少し笑うと、背中に背負った鞆から刀を抜き、切っ先を喉に当てる。

「フン……本当にいいんだな……？」

「はい……」

バースは刀をひく。

そして……

「やっぱやゝめた。お前を殺しても俺に得はないんだ」

「……………え。」

少年は唾然とする。

さっきのゴリラが小さく見える。

「グアアアアアー!!」

ゴリラが威嚇しているのも無視で、バースはどんどん高く上昇していく。

「とりあえず〜カントサウスリーに向かうぜ〜。腹ごしらえ〜」

バサアー！！

と、さつきよりも大きな羽音。

びゅーんと、とんでもない速さで空を翔けた。

「そついやあ〜レビルにカントサウスリーに向かえつて言われなかつたか〜」

「……………。」

「まあいいや〜。言っておくけど、心を開いてくれるまでくつついて離れないからな〜」

「……………え……………」

初めての優しさ……………

少年の死んだような目に、少しだけ明るさが取り戻されたのであった。

「はらごしらえ〜！〜！」

バースは、カントサウスリーの肉屋のような場所に降り立つと、強引に少年を椅子に座らせた。

「言つとくけど〜逃げて俺の目からは〜逃げられないからな〜」

「……………ッ……………くそ……………が……………」

(さっきの優しさも……やっぱり……やっぱり受け入れられない……何だまされた事か!!こいつもきつとそうなんだ!すぐに裏切るんだ!!仲間なんて偽りなんだ!!……)

友情への拒絶反応……

少年はバースをギロリと睨みつける。

「……………お前一体なんなんだよ!僕に纏わり付いて!付いてくんじゃねえよ!死のうが死なないがお前には関係ないだろお!!」

ダッ!

と、少年は店を飛び出し、走り出した。

「ふーん……言うねえ」

バースは、長い舌をチョロツと出し、店に金を払って、上空に飛んだ。

「……………あの好みの少年は……いたあ」

バースは、少年に向かって猛スピードで向かう。

「うわっ!」

少年は、バースにつまみあげられた。

「こいつ……教わってもいないのに、二度も雷魔法を……」

バースは、微笑みながら少年を背負い、宿屋へ向かうのであった。

少年が目をさますと、周りは一面、木の壁。

そして、自分がベットの上に寝ている事に気付く。

「……ここは？」

横には、バースが座っていた。

「……俺……」

少年が何か言おうとしたが、それより早くバースが口を開く。

「お前、雷の魔法使えんのかよ。何で教えてくんねんだよ」

「え……？」

少年は口をぽかーんと開けている。

バースはさらに続ける。

「お前どこで魔法なんか覚えたんだ」

「ま……魔法？何言ってるんですか？魔法なんか使える訳……」

……」

「そ〜だ！オヤジんところに行こう〜オヤジならわかるかもしれない」
バースが、少年と心鏡屋に向かう。

途中で、バースが少年に聞いた。

「そついや〜聞きそびれてたけど〜お前の名前は何だ〜？」

少年は、急に頭の側面全体に強い痛みを覚えた。

耳鳴りがし、動悸が早まる……………視界が何重にも重なり、汗が吹き出る……………

(……………くそ……………なんなんだ……………？……………)

バースが異変に気づく。

「お、おい！お前！大丈夫か！？どうしたんだ？おい！！しっかりしろ！！おい！！返事をしろ！！おい……………」

(……………ここは……………どこだ？)

暗い景色から、どンドン「あの「光景に近づいていく。

(ここ……………知ってる……………けど……………)

教室。

(……………一番嫌いな場所だ……………)

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、担任が来たと同時に生徒が席に着き始める。

少年の座っている机には、「クズ」、「死ね」、「消える」等という罵声が机いっぱいに書かれていた。

少年は、顔も良く、運動も良く出来ていて頭もいい。

しかし、なぜ、いじめられるのか……

入学間もない時に、風呂に入っていないような、暗い女子がクラス全員でいじめられていた。

中学の時から、人気そのもので明るい生徒だった少年は、イジメは絶対にダメだと思い、その子を、かばってしまった。

その日から……

少年の集団的なイジメが始まった。

そして、いじめられていた子は、自殺で学校から姿を消し、少年へのイジメがエスカレートしていく……

少年は、本当に気持ち強い。

1ヶ月も耐え、登校し続けたのだ。

威圧感を放つ少年への、イジメも止まりかけていた……が……

親友が……突然昏睡状態に。親からは、死んだと聞かされていた。
希望を……失った……

親友がいなかったら、1ヶ月も耐えられなかっただろう。

一気に暗くなり、威圧感を失った少年を荼化し、イジメが2倍以上に膨らんだ。

……そして、少年は自殺へと踏み込んだ。

「……………」

少年が目覚めます。

「おお〜！目が覚めたか〜」

少年はバースに背負われていた。

「俺が名前を聞いたらいきなりぶっ倒れるんだからな〜ビックリしたぜ〜」

「……………聖哉……………」

少年は、友の名を呟いた……………

そして……………

3章 イジメ(後書き)

そして!!???

4章 心鏡屋（前書き）

151

4章 心鏡屋

「ほら〜心鏡屋だぞ〜ついたぞお〜」

人気がなく、薄暗い路地裏に、古ぼけた店の前。

バースは、暖簾をどかし、店の中へ入っていった。

「おお……………バースちゃん……………なつかしいねえ……………」

「おお〜おじ〜ちゃん!」

心鏡屋のおじいちゃんは、少年を見て、目を鋭くさせた。

(この少年は……………)

おじいちゃんは、少年と2人にさせてくれと、バースに言った。

「え〜なに〜?なんかイヤラシイことでもやるのかよ〜」

「そんなんではない。わしが導いてやるんじや。」

「あ〜お告げね。」

バースは、ドアに手を掛け、んじやあな、と一言。

バサツと羽音を立ててさっさといった。

「おまえ……わしについて来い。」

「な、なんでだよ!」

「いいから……付いて来なさい。」

少年は、凄まじい殺気を感じ、口が開かなくなった。

店の奥に、埃だらけの鏡が立てかけられていた。

「この鏡の前に立って、自分の目の奥を見なさい。……これは真実の鏡とってお。お前の過去、そしてやるべき事が直接脳に再生されるはずじゃ。」

少年は、真つ暗な目の奥を、見ようとした……努力した……

刹那……

少年の目に光が宿り、硬くなった表情に笑みが浮かんだ。

同時に、大粒の涙……

心からの笑みと、心からの涙。

「あ、ありがとう……ありがとう……!」

少年は、そこに泣き崩れ、何度も何度もありがとうと言った。

「……………っ……………」

少年が目覚めます。

「おお〜！目が覚めたか〜」

少年はバースに背負われていた。

「俺が名前を聞いたらいきなりぶっ倒れるんだからな〜ビックリしたぜ〜」

「……………聖哉……………」

少年は、友の名を呟いた……………

そして……………

「……………ば、っ、バースさん……………」

バースは、ビクウと、飛びのいた。

「ど、どついひいたっていゅーんだあ！急に穏やかな声をして〜」

バースは動揺すると呂律が回らなくなる。

「全て……………わかりました……………」

「……………なにが〜？」

「俺の名も思い出しました。……………」

「おお！……なんつー名前なんだ？」

「俺の名は、桐谷紫苑きりたにしおんです。」

「き、きりたに……？」

「ああ、シオンでいいですよ。」

「し、シオンか、良い名じゃないか。」

バースは、シオンの生き生きとした表情に、笑みを浮かべていた。

「いままで、お礼をいえませんでしたね………ありがとうございます。そして………これからも………」

「ちよっ………てめゝ照れんじゃねえかゝテレテレだぜ」

バースは、顔を真っ赤にして、首の裏をボリボリと搔いていた。

「あっ、あと、あのおじちゃんに装備貰いました。」

シオンが、指を鳴らすと………

「ああ、3回か。」

シオンが3回連続で指を鳴らすと、一瞬で装備が身体を纏った。

「この装備はビギナーズランクの装備だな」

バーズは、装備をジロジロと見て、最後にシオンの顔を見た。

「おめえ、かなりカワイイ顔してんな。」

「そつ、そんなことは……………」

「照れてやがんぜ。」

2人で、わははっと笑うと、シオンが言った。

「森に、行きましょー！」

バーズは、鋭い歯を光らせる。

4章 心鏡屋（後書き）

151

5章 暴走、そしてミッション

「あの森は、ブロンズランクからだあ。まずは、稼ぎがてら……ギイルウドオーに加入するぞ。……！！！！！！！！」

「そんな……バカな！！？？ぎ、ギイルウドオ……！！？？……つてなんですか？バースさん。」

「正式には、ギルドつつうんだが、その、依頼つつうか、与えられたミッションを、こなすと、金が手にはいるんだア、それに、一週間後に迫ってるけど、『昇格試験』ってのもあるから、強く鍛えとかね」と。

「そ、そ、そんなんですか……」

「ここだ」

バースが案内した所は、「セレナーデ」と言う城だ。

バースが言うには、この世界には、城は一つしか存在せず、城内部には、色々な部屋があり、中でも最も大きな部屋に、ギルドがあると言う。

そして、大部屋の一番奥に、このギルドに加入したことを示すカードを発行する事が出来る場所がある。

「俺はもちろん入ってるぜ」

バースが取り出した掌ほどのカードは、銀色に輝いていた。

「シルバーランクだぜ」

そうして、話しながら歩いていると、カードの小部屋に着いた。

「そういえば、何で僕がギルドカードを持ってない事を知ってるんですか？」

「鋭いね」

バースはにたりと笑う。

「そりゃ俺はレベルと同じような役割だからな」

「……………え？」

「お前がアルティピアから来た事も知ってるしな」

紫苑は細い目をして困惑する。

「あの…………アルティピアって何ですか？」

「お前のいた世界の事だろ」

「はあ……………」

そして、紫苑は気になる事ができた。

「じゃあ、この世界の名は？」

「レイティビアだよ」

バースは当たり前のように笑って答える。

紫苑は現実世界の名も、異世界の名も、今知った。

(アルティビアと、レイティビア……………)

目次

紫苑が、心鏡屋で知ったアルティビアへの帰り方は、ただ一つ……………

レイティビアにある紋章を5つそろえなければならぬ。

4つは、旅を続けていけば手に入らないことはないのだが、5つ目は幻の紋章と呼ばれている。

紫苑が深く考えていると、バースがのんきに言った。

「カード発行機の前に来たぞー」

目の前には、ガチャガチャのような四角い機械がウィイーーン、と唸っている。

「まずは、新規登録のボタン押して」

ポチッ

目次

「ソレデハコノ魔感知口ニ、指ヲ入レテ、魔力を出シテクダサイ」

紫苑が、指を入れて、力を入れると……………

「感知シマシタ。スキャンデ、名ヲ解析シマス。」

ウイイイーン……………

「おお！力入れるだけで魔力つて出るんですね！！」

「俺なんていつでも出てるぜ」

「す、すげえ……………」

「名ハ、シオン。出身界、アルティピア」

バースが言った。

「この機械はな、魔力を入れることによって、脳の電波を受信して解析するんだ」

「へ」

「この機械は、魔鉱石で出来た石なんだぜ」

「スキャン完了。カードヲ発行シマス。」
ウィーン。

カードが発行口から出て、紫苑がソレを受け取る。

「じゃあ、ギルド加入を申請するぞ〜」

「は、はい!!!」

ギルド加入窓口に行き、加入手続きを終えると、いきなり紫苑とバ
ーズのカードが振動した。

「お〜早速任務だぜ〜」

「え?.....」

「この城には〜毎日たくさん依頼が来てて〜ギルドの加入者に平
等に依頼が割り振られてるんだ〜。どの地域にいても、振動を感じ
たらカードに魔力を入れれば、依頼内容が表示される。べんりべん
りだぜ〜そんなでもってミッションをクリアしたら、城のサブカード
に金が振り込まれて〜色々な地域にある金預店に〜カードをスキャ
ンすれば〜振り込まれてある金が〜でてくるでてくるんだぜえ〜
〜アツイエーッ!!」

「なんか嬉しそうですね……バーズさん」

「お金は大好きなんだ〜」

「まあ、早速ミッションを確認するぜ〜」

任務内容

受注可能最低ランク「ブロンズ」

もしくはブロンズ以上と、ブロンズ以下の共同パーティーも可。

報酬金額 4000アルグ

日本円換算で 4000円

報酬道具なし

任務詳細

シグラム草原で、（ホシ）6の鳥モンスターが大量発生。駆除を直ちに要請する。終了確認は、自動。

モンスター名 ピージョ

有利属性 雷・氷

不利属性 土

~~~~~

「 6 かつ余裕だぜ」

「 って??」

「 は、モンスター特有のレベルで」

5 までがビギナーランクの許容レベル」

20 までがブロンズランクの許容レベル」

80 までがシルバーランクの許容レベル」

320までがゴールドランクの許容レベル  
1000がプラチナランクだよ」

「いまいち実感わかないな」

「まあとにかく行くところランクが上がるたびに色んな特権があるんだよ」

「おお」

こうして、ダッシュで町をでて、バースの背に乗って、草原に行った。

「ここがシグラム草原か……」

紫苑は、最初に来た草原だということを忘れていた。あの時は、重度の精神崩壊のせいで、意識が朦朧としていたのだろう。

「初めて紫苑に会った場所だな」

「……え!!??」

「……とにかく……来るぞ!!」

ピージョが、ざっと4000体くらいいて、草原の4の1が覆いつくされている。

「コケーンツ!!」

一体のピージョが、仲間のピージョに敵が来た事を告げたかのよう

に、大きく鳴いた。

「コケー、コケツコケコケツ！」

「ほ…………ざ…………く…………な…………よっっっっ！」

バースが、口から火魔法をはいた。

紫苑は、剣を構え、前方から来るピージヨを斬っていた。

斬っても斬っても一向に減らない……

「これじゃあラチがあかないぜ！」

バースが高く跳ぶ。

「燃え尽きる！！フレイムブレス！！！」

バースの口から、大きな火の塊が出て、ピージヨを一気に減らした。

「す、すごい……………」

紫苑は、ボーっとしていると、後ろからピージヨが飛び掛ってくる。

小さな鶏のような姿なのだが、蹴りの力が強く、紫苑は、吹っ飛ばされてしまった。

バースが、紫苑の元に飛んてくる。

「大丈夫か？紫苑！！」

「いっつつ……」

紫苑はピージヨをギロリと睨みつけ、うおおー！と叫びながらピージヨを斬りまくった。

あと、400体位になったとき、ピージヨが一点に集まり始めた。

「なんだ！！？？」

「親玉の参上だぜ」

集まった場所は、鳥の巣のような穴。

そこから、大きな影が二つ出てくる。

「ディピージャだぜ」

ディピージャは、大きくゴゲーーツ！！！！と鳴いて、羽ばたいた……が、飛べなかった。

「なるほどこのオスやメスが、いっぱいピージヨを生んでたんだな。ちなみに、ピージヨ類は、魔法系が発達してるから魔法を放つてくるぜ。飛べないけどな」

「と、飛べない鳥……？ダチヨウとかニワトリみたいだな。」

姿は、ニワトリ。しかし、かなりでかい。

ディピージャが、火炎を放射した。

「ディピージャの炎は、避けるんじゃないなくて、壊すしかねえぜ！壊さないと一生追尾してくるからなー」

「うわ………」

早速、ディピージャが腹立つ声を上げ、炎を2発放射する。

結構速い。

バースが、炎で打ち消した。

「ディピージャは、ああ見えて魔力の貯蓄量が多いんだ〜持久戦だぜ〜」

紫苑が、剣を構える。

「おい〜紫苑。何すんの〜？」

ボジュツ！〜と、ディピージャの口から炎が放射され、バースに向かって飛んでくる。

紫苑は、タイミングを合わせて、炎をぶった切った……が、一瞬で再生してバースに襲い掛かる。

「ディピージャの炎は、本当に跡形もなく消すくらいの力を込めて、実際に跡形もなく消し飛ばさなきゃ再生するよ〜」

バースが炎で打ち消す。

一方紫苑は、ピージヨを討伐するために、巣の近くに行った。

巣からは、強烈な異臭が・・・

ピージヨ類は巣の卵を守るために、強烈な臭いを放っているのだからか・・・？

良く意図がわからないが、とにかくくさい。

吐き気がする。

突然、両方向からピージヨが襲い掛かってくる。

紫苑は、冷静に、右から来たピージヨの攻撃を受け流し地面に叩きつけ、左から来たピージヨの腹に剣を刺す。

そして、再び右から飛び掛ってきたピージヨを縦に両断した。

紫苑は、確かな手ごたえを感じていた。

しかし、紫苑に危機が迫る。

80体ほど討伐した頃、雄と見られるディピージャが、後ろから迫ってくる事も知らずに4方向から襲い掛かってくるピージヨを斬りつけていた。

ディピージャが、火炎を紫苑に向かって放射する。紫苑はそんなこととは知らない。無論。雌と戦っているバースも気づかない。

火炎が紫苑に接近した瞬間――

紫苑の第六感が鳴り、後ろを振り向く。

既に火はすぐそこにまで迫ってきており、回避は不可能。助けは無い……

紫苑は、内在的に存在している大きな力の渦が、体の外に放出された。

「っ！！！！ああああああああああああああああっ  
っっ！！！！」

体の枷が爆ぜる。力が湧き出る。意識が飛ぶ。

本能が生きるには、相手をねじ伏せ、破壊するしかないと判断したのだろうか？

紫苑から大きな電気が放出され、力が増幅及び範囲が拡大していく。

電気の槍がディピージャの身体を消し、ピージヨの群を消し、バースと戦っているディピージャを消す。

そして、槍がバースの元へ伸びていた。

紫苑は、生を維持するために、敵に死を与える。

生きるために、死を与える。

他の一切を壊し殺戮し、生を貪欲に得る。

雷は勢いを殺さず具現化し、上級魔術の威力で暴れる。

一般の人間ならば触れた瞬間血液が沸騰し、毛穴から血液が一瞬で体外に排出し、肉が焼け焦げ、内部までもが一瞬で焼け腐り、死滅する。そして、昇華し気体と化するだろう。そしてこの世界での雷というのは、属性内でも最強を誇る。

「うぐああっ!!!」

紫苑は、それからしばらく、体の魔力がなくなるまで暴走し続けた。

6章 大会、そして魔法習得（前書き）

151

## 6章 大会、そして魔法習得

それから数週間後、草原に呼び出された紫苑は、バースが来るのを待っていた。

数分すると、バースが飛んできて、着地した瞬間、こう言った。

「じゃ〜お前に魔法を教えてやるっ」

「え!？」

そんな所だと思っていたさ。

覚悟は決まっていたため、迷いは無く、返事をした。

「はい」

バースは、紫苑の手首を握ると、魔力を少し注入した。

!!!!!!

「すごい……力が………漲ってくる!!!」

紫苑の血流が加速する。

心拍が早まり、顔が熱くなっていく。

「あとは〜おもいつつきり力を入れてみる」

中腰になり、踏ん張る。気張る。

「ん~~~~ん~~~~ん~~~~」

ふう~~~~

紫苑から大き目の屁が出る。

紫苑の顔が、また別の赤になった。

「まだまだだ〜眼ん球が飛びでる位に力を込めろ〜」

「あつ……はい!!」

今度は、「「実」「」が出るくらいに力を入れた。

「んおお~~~~んん~~~~うおおお!!」

「いい感じだ〜もつと〜もう一押しだ〜」

(くそお!!実が………実がああああああ!!!)

実が、無理やり体外に押し出されようとしている。

「んおおおうおらあああああ!!!」

バチッ!!

体から電気が迸る。

「いいぞ〜センスあるぞ〜」

バチチチチツッ！！！！

「うわああ！！！！喉が！！！！焼ける！！！！」

まん丸の硬い者が気道をふさいでいる。

息が出来にくくなった。

バチチチチチチチチチチツッ！！！！

紫苑は、腹に手をあて、うおえと、嘔吐した。

少しの嘔吐物に混じった黄色い石が口から出てきた。

「成功だ〜いままで20人魔力石を吐かせる修行を付けたが、最速だぞ〜」

「はあ……………はあ……………な、なんですか？コレ。」

「ソレは〜全ての動物にある、魔力を押さえつける枷だ〜」

「……………枷……………ですか。」

「魔術を止める時は、その石を自分の魔力で破壊しろ〜その瞬間から、魔力や、この世界で得た力は全てリセットされる〜壊すときは〜壊したい！〜っていう〜強い自分の意志がないと〜壊れないようになってる〜」

「……………枷……………」

「後は簡単だ、力を入れれば、すぐに電気が出るはずだ、それに、さっき注入した魔力は、きっかけを作るための魔力だ。」

「ふんっ。」

軽く力を入れる。

バチイイイ！！

すぐに発電した。

「お……………おお……………！！おお……………！！」

「じゃあ、魔力コントロールの修行もするか。」

バーズは、紫苑の前に仁王立ちする。

「まず、電気の玉を掌につくるんだ。」

紫苑は手に力を入れると、頭の中で電気を固めるイメージを浮かべる。

ふーっと、息を吐いて、掌に集中する。

すると、掌に電気が集まる。

「よーし、じゃあそれを玉にして、俺に飛ばしてみろ。」

「はい。」

紫苑は、電気を玉のような形に近づけ、右手にある電気の玉をバースに飛ばした。

「うおっつとっ！！」

バースはそれを上手くかわす。

「おおっ何もかも速いなっすごいなっ」

バースは、唸る轟音を背後に感心する。

「そっ、ま、まだまだですよ」

紫苑がさっきの赤と違った赤を表情に浮かべる。

「よっし！まだまだっまだまだ行くぞおっ！！」

バースが人差し指を縦に振り、魔術を撃てと命じる。

「うおおらああ！！！！」

響く電撃音……………

天に消える。

魔術の修行を1週間続け、大会に臨む。

ブロンズランク昇格大会

一回戦

紫苑は、程よい緊張感を持って、試合に臨もうとしていたところ…

……

バースが呟く。

「負けたら飯当分なしだな」

「!!!!!!!!!!なっ!!!!!!!!!!」

紫苑の緊張は一気に高まった。

紫苑が会場に向かった後、観客席で、バースがリキュールVの空き瓶を取り出して、大きなため息を一つ。そして、懐にまたしまった。

大会登録を済ませ、次は紫苑の番だった。

会場に紫苑の名前が大きく響く。

紫苑は思いきり会場の中央に向かって走った。

司会者の声がよく聞こえてくる。

「今回の試合は、紫苑VSランディーだああ!!」

紫苑はどんな相手なのかとドキドキしていた。

相手の姿を見るまでは……

ランディーという男は、左手にビールらしき物を持って現れた。

紫苑の緊張は一気に消えた。

「何だ、おじさんか。」

紫苑は少しやる気が無くなる。

途端、司会者が叫ぶ。

「それではああああ！！レディ〜ファイト！！」

司会者の叫びと共に、ランディーの左手が素早く動く。

「馬鹿な！この動き……ただ者じゃない！！」

紫苑は一瞬ドキッとする。

ランディーは缶ビールを顔の前に近づける。

「この動き、まさか……まさか！！」

そして、ランディーは、ビールを飲み始めた。

「やっぱり……！！」

マヌケな顔で、肩を落としている紫苑に空になった缶ビールを本気で投げた。

ギリギリかわしたが、少し頭に来た紫苑は、つい怒鳴った。

「おわっ、何すんだ！」

ランディーがやれやれ。と言う様に頭を軽く振って、言った。

「もう試合は始まってんだぜ。」

おっさんの癖にギザな言い方に、またイラッと来る。

「なんでもありなのか、この大会！ってか、おっさんでも容赦しないぞ！！！」

「容赦されるほど俺は弱くないぜ！」

シャキーン！！っていう感じにやりと笑い、またかっこつけた。

「この……………おっさんが！！！！アアア」

紫苑は、ランディーに向かって走る。

すると、ランディーがポケットに手を突っ込む。

そして素早く何かを取り出す。

「何だ！？」

紫苑は足を止めてしまう。

ランディーが取り出したのは……………

「枝豆サイコー！」

「……………」

紫苑はランディーと試合するのが嫌になった。

「フッフッフ……………立ち止まったら俺の攻撃はかわせねー。」

ボン！と顔の前で親指以外の4本指を弾いた。

「まさか……………枝豆と見せかけて爆弾!？」

爆弾だと想像するのは無理も無い。

「くらえ!!枝豆弾！」

男は枝豆が入っている部分をまるで食べるかのように押し出す。

「おるあああ!!！」

紫苑に枝豆が飛んでくる。

そして、顔にペトリ、とくっつく。

「……………」

紫苑は脱力した。

その瞬間、

「隙ありー!!」

「ぐっ!!」

ランディーの跳び蹴りが紫苑の腹に当たる。

「甘いな。」

(なんだ、この戦法!!マジうぜえ!!)

紫苑は電気を右手に集め、ランディーに放出する。

ランディーは吹き飛んだ。

「……………弱っ。」

すこし罪悪感。

しかしランディーはすぐに立ち上がる。

「いってて……………それにしても雷か、やるなー。だが次のはどうかな。」

ランディーは、紫苑に素早く近づく。

そして、枝豆を紫苑の口にくっつけ、空いている手で紫苑の口を広げる。

その間、僅か0.06秒。

「枝豆爆発弾!!」

「なっ!?!」

驚く紫苑の口に、枝豆が入ってくる。

「まさか!口の中で!!」

「そう……この技は口の中で旨味が爆発する!」

「……………」

紫苑は恐る恐る枝豆を噛む。

少し塩のかかった適度なしょっぱさと、枝豆の独特の味と、ほんのりとした甘みが口いっぱい広がる。

「……………普通に旨い。」

「そこだああ!!」

「ぐあっ!!!!」

ランディーの拳が素早く紫苑の腹に当たる。

「は、速い……………」

紫苑は痛みと驚きと旨みで頭がごちゃごちゃになる。

「だが、相手はおっさんなんだ。猛攻撃をすれば……………って……………  
おっさんはどこだ?」

紫苑は辺りを見回すが、どこにもいない。

その時、ポトリと、紫苑の頭の上に枝豆が落ちる。

紫苑が上を見ると、ランディーが枝豆をたくさん持っている。

「アツハツハッ いくぞ、枝豆爆撃弾!!!!」

ランディーは空中から枝豆を落としてくる。

「くだらね……………」

紫苑がそう呟くと、紫苑の近くに落ちた枝豆が、爆発した。

「うわっ!!!!」

紫苑がのけ反ると、紫苑の肩に枝豆がくつつき、爆発する。

「ぐあっ!!!!」

紫苑が倒れると、体中にたくさん枝豆がくつつく。  
そして全ての枝豆が爆発する。

「あぐあああ！！！！！」

紫苑の体はボロボロになる。

「ゼエツゼエツ……………」

倒れた紫苑の横に、ランディーが着地する。

「ここまでのようだな。」

ランディーが紫苑の襟を掴み、持ち上げる。

紫苑はすかさず、相手に電気を流す。

「つつ！」

「そこだあ！！！！」

紫苑はランディーを蹴り、さらに顔を殴る。

ランディーは動かなくなった。

「うおおおおおおお！！！！」

会場が、歓声に包まれる……………が、

「ま、だ、まだおわっちゃいねえ」

ランディーがゆっくり立ち上がり、おもむろに紫色の枝豆を取り出した。

「!？」

ランディーに魔力が取り巻く。

ヒュッ!

視界から、消え、後ろに魔力。そして、口には、紫の枝豆。

「!？」

紫苑がすかさず吐き出そうとするが、ランディーが顎を殴り上げる。

口の中で……………枝豆が……………はじけた。

ゴボツ!!ゲボツ!!

紫苑が嘔吐する。

「ふふっ。その枝豆は、POISON入りの特製枝豆だ。魔力を全て吐き出してもらう。」

魔力が、搾り取られるようにどんどん無くなっていく。

(くっそ〜！このおっさんムチャクチャだ！！……………それにしても……………体の……………力が……………)

そして、魔力を全て吐き出した頃に、おっさんが叫んだ。

「亮様サイコー！枝豆の次にサイコー！！！！」

そう言って、ばたりと倒れた。

「な、何だ？このおっさん……………」

息をしていない……………！？

そして、会場がざわざわとどよめいた。

魔力が無くなって、紫苑の意識が遠のく。

(くそ……………体が動かねえ。……………しにそお……………)

そして、ゆっくりと倒れ、紫苑は意識を失った。

そして、2回戦……

紫苑は、げっそりとしていた。

「頭痛い〜バースさん〜魔力を回復する薬って無いですか〜？」

「あるけど〜、あるよ〜」

蒼い瓶を取り出す。

「リマジヴ〜コレもなかなか高いんだよ〜。さあ！NOME〜」

紫苑が、ゴクゴクと飲み干すと、表情に力が漲かおっていた。

「……………いける!」

顔を二度パンパン!と叩き、会場へ向かった。

「さあ!!!二回戦、3試合目は、紫苑バーサスAXELアクセルだあああ〜  
〜!!!!!!」

全体黒い服装で、サングラスのようなものと、黒いマスクをしている。

なにかぼそぼそとっている。

「うおおおおお!!!! Nasubiサイコー!!」

「うおう!?! また同じような臭いが!?!」

紫苑は、いやな予感がしていた。

レイティビアを照らす太陽のような星が輝き、影が出来る。

「とにかく、さっさとケリ付けなきゃ。また何か食うのは嫌だし…」

「……」

両手に電気を集め、丸い球を創り、上空に飛ばした。

「まあ、俺の秘密兵器を見せてやる!」

その丸い球から、電気の棘がAXELに伸びる。

ザクッ！

「うぎゃあ。」

バタツと倒れ、動かなくなった。

「ランディーよりよわっ。」

紫苑が、動かなくなったAXELに近づいて、マスクを外し、ほったをペタペタと叩いた。

「もしもし。もしーもしー！」

紫苑が油断してほったを叩いていると、口元にニヤリと笑みが浮かんだ。

「!!!??？」

AXELが紫苑の影を触った瞬間、その姿が消えた。

「ど、どこに行った!？」

紫苑の後ろの影から、スーツとAXELが出て、背中にナスビをつける。

紫苑が後ろを振り向くと同時に、AXELの姿が影に溶ける。

「な、何だこれえ!？」

紫苑は、背中についたナスビを見て、叫ぶ。

ナスビは、どんどん大きく、重くなり、紫苑の身体をすっぽりと包んだ。

「くそ!」

雷の剣を象り、ナスビに刺す。

ばしゅうつーと、剣が消えた。

「残念だな。そのN a s u b iは魔力じゃ破れない。」

上から、ナスビが大量に振り、紫苑の腕にたくさんくつつく。

「!?!爆発か!?!密室で爆発したら……………」

ナスビがカツ!と光り、ナスビの口が開き、噛み付いた。

「いって!」



「N a s u b iサイコオー！！その次に亮様サイコー！！」  
そのまま、ばたりと倒れ、息をしなくなった。

紫苑は、また魔力が消え、意識を失った。

意識を取り戻した時は、かなりの時間が経っており、頭痛は再び起こっていた。

試合を見る。

その光景は、迫力のあるものだった。

火炎と氷塊が交錯し、葛藤していた。

氷が優勢。

上空に飛んだ氷使いは、氷の粒を無限に飛ばし、氷の粒が地面に付いた瞬間氷柱を発生させた。

炎を当てても、びくともせず、自然の原理では溶ける事の無い無限氷。

水にその氷を当てれば無限氷になるが、無限氷を溶かす事は出来ない。

まさに不可逆の氷であった。

一方、炎使いは、「竜族の火炎」白の特別な炎を操り、武器にして

いた。

焼くのではなく、溶かす。

全ての現象を溶かし、無かった事に出来る。

無論、無限氷でも3発火炎を喰らえば消える。

この戦いには、矛盾が生じている。

大爆音と連続的に起きる固体化的音鎖。

体の戦いは一切無い。全て魔術の戦い。

一度、氷が貫いたのだろうか………炎使いの脇腹に大穴が開いている。しかし、炎使いは何の支障もないような動きをしている。

氷魔法使いは、氷の膜が守っていて、炎が届かずに居た。

熾烈を極める。ビギナーズランク同士の戦いなのに、シルバーランク顔負けの戦いであった。

すごかった。

紫苑は、その2人を尊敬の眼で見続ける。

結末は……………

氷使いの勝ちだった。

その瞬間、

3回戦の相手が決まった。

最悪だ。

その相手は………そう。

氷使いだった。

第3回戦。 1試合目

紫苑VSマーキュラス

本音は………

戦いたくない。

勝てる気がしないのだ。

あんな流麗かつ華麗な技を繰り出し、芸術的に敵を追い詰め、餌食とする。

あんな敵に太刀打ちできるのだろうか？

最大の壁が立ちはだかる。

集合のブザーと共に、司会が大声で叫ぶ。

「3回戦は〜〜ツ!!!紫苑!バーサス!!!マーーーキュラス!  
ーーー!!!!!!コレはハイレベルな試合となりそうだ〜〜!!!!!!そ  
れでは〜〜…………レディー………ファイツツツ!!!」

ピゴー!と、試合開始のブザーが鳴る。

先行は、マーキュラス。

いきなり無限氷の膜を形成し、その中に入る。

そして、紫苑は剣でその膜を叩いた。

ギイーン！！

鈍い金属音と共に、紫苑の剣が粉々となった。

「……………かてえな。」

正直、躊躇っている。不安もある。

でも……………

やるしかないんだ！！

4本地面から突き出てくる無限氷に電撃流し込み、分子レベルで振動させ、その固体を崩した。

溶かしたり、消したり出来ないのなら、細かく崩せばいい。

「紫苑の奴！！やるじゃねえか〜」

バースも感心する。

「ははっ！！俺とお前、相性いいのかな？」

無理に笑顔を見せ、余裕の表情を浮かべる。

「……………笑止。」

氷柱が、大量に突き出てくる。

紫苑は、自分の居る場所に大きな雷魔術を流し、突き出てくるはずだった氷柱を消し飛ばした。

しかし、それはマーキュラスの伏線……………

他の氷柱からまた氷柱が生える、それが連鎖的に起こり、どんどん範囲を拡大していった。

「やべっー!!」

紫苑が危機一髪で、体中から電撃を放ち、氷を砕いた。

「やるな……………」

マーキュラスそう言い、魔力を込めて、新たな魔術を発動した。

マーキュラスの後ろに大きな雪像が下から出てきて、その像の口が開き、氷を連射した。

紫苑は、それをかわし続ける。

しかし、氷に含む驚異の特性に気づいた。

地面についた氷は、瞬時に溶けて、氷像に還元されていた。

これこそまさに無限……………

「……………どうすれば？」

かわし続けるのは段々難しく、やがてはかわせなくなるのは解りきっていた。

それに加えて、還元は自動的<sup>オート</sup>。あとは、発射するだけ。

魔力の使用量は、ほとんどのに等しい。

無限氷の真意は、その魔力の消費量の低さである。……………

勝つためには、「あの力」を借りるしかない。

氷の像の力から逃れるために、どんどん後ろに退く。

そこには、魔氷の腕が伸びていた。



あわてて後ろに転移する。

転移先には、既に紫苑が立っていた。

……破壊……

手を大きく振り上げ、轟音と共にマーキュラスを……

破壊しなかった。

途中で動きが止まる。

逃げ道を見つけたネズミのように、隙に付け込み、侵食氷衝と呼ばれる、道連れ魔術を使った。

全ての魔力を使った。……が、届く事は無かった。

粉々砕けた破片は、ダイヤモンドダストのように煌びやかな光景だったが、場には黒い魔力に満ちていた。

枷が戻った頃には、マーキュラスの魔力が切れて、永遠氷。万年氷から、千年氷、百年氷。十年氷、普通の氷。と、魔力の低下が著しく、もう、マーキュラスになす術は無かった。紫苑は、意外とあっけないと思いながらと、審判の方見た。

審判も、首を縦に振り、試合終了の合図を出した。

意外と余裕で、魔力の残りも意外と多かった。観客席に戻ると、バースが、安心したように言った。

「暴走化したから、少しひやっとしたぜ〜、でも、暴走中に意識はあるのか？」

「えっと、なんだか真っ暗な闇の中に自分が一人しか居なくて、光が見えて、光に手が届いたら、意識が戻るんです。」

(……………なにかの呪術か?)

バースは、ふとレベルのことを思い出した。

「……………あいつ……………」

紫苑の4回戦が始まると同時に、バースは、上空高くへ舞い上がり、「空間の裂け目〜ロード・ゲート〜」と呼ばれる六道を繋ぐ半透明な門へと飛立った。

「道の初め」の前の、「道の隙間」と呼ばれる真っ黒な空間にバースが足を踏み入れると同時に、首飾りが大きく光り、その光がレベルの首飾りにアクセスする。

光をたどると、「時空の歪み」と呼ばれる時間と空間の概念を受けない「パンドラボックス」の中心へとレポートし、そこに立っているレベルの右手首を掴んだ。

「紫苑になにをした……？」

レビルは、何も知らないように首をかしげ、目を細めた。

「知ったかぶりをするな。お前が封印したのは明確……それに、あの感じは、三大封印呪術の一つ、「ガフの部屋」を体内に入れたとしか思えない。あれは、どれだけ危険なものか……それに、一瞬で封印するなんて神業的なことが出来るのは、お前と、アイツだけだ……！」

レビルが、手から血が出るほど強く握り締めながら、言い放った。

「あれは、どの道誰かに封印するしかなかった！いくら、あの子の命を蝕もつと……！」

バーズの頭に血管が寄る。

「……解っててやったのか！？あのままほって置けば、マギ・パウード（強制魔力増幅作用）による物理的副作用により、肉体崩壊を

起こすぞ！お前は、やっぱり昔から命の重さを解つちやいない！！  
命の危険が迫ると、マジパワードの効力により、脳波をジャックさ  
れ、意識が飛ぶ……………まさにガフの部屋の症状そのものじゃないか  
！！」

「……………だったら……………だったら私に全ての責任を負えって言うの  
！？……………そんなの……………耐えられないよ……………」

バースは、レビルを力いっぱい殴った。

「アイツは、アルティビア（人間道）から来たんだぞ！？修羅道で  
生まれ、鬼の力を継いだお前とは、丈夫さの桁が違う……………！！」

レビルの口内が切れ血が出るが、口内の傷口が一瞬でふさがり、血  
が止まる。

「……………もういい。帰って。」

「あ？まだ話は終わってない！！」

「かえれ！！」

レビルがバースの額に手を当てた瞬間に、レイティビアに返還され  
ていた。

「あいつ……………」

紫苑の準決勝の相手は、召還術師だった。

名はライゼン。

不気味な姿で、少し恐怖を感じる。

審判のスタートと同時にライゼンが背後に回る。

電撃で応戦するが、なにかにぶつかっていて通らなかった。

ライゼンは接近戦を挑んでいるのかは知らないが、異様なほど懐に入り込もうとしてくる。

電磁加速と、電磁浮遊で空を駆け回り翻弄し、隙あらば電磁膜で覆ってしまおうと思ったのだが、簡単には行かなかった。

空中に4つの魔方陣が発生し、火で出来た虫などをピチピチ飛ばしてくる。

電磁援護でその程度の火力は物ともしないが、どこかに誘い込まれているような気がしながらも、なるべく当たらないように、ヒノムシの少ない所に移動し続ける。それに比例して徐々にライゼンに近くなっていく。

赤いヒノムシが、徐々に蒼いヒノムシに変わっていき、蒼いヒノムシは魔力を食っていくのに気づいた紫苑は、反射的にライゼンから離れた……のが失敗だった。さっきまでヒノムシを放っていたライゼンが液体になり、背後に本体が待ち構えている。

「……………残念だったな。今まで攻撃し続けていたのは召還魔獣 ド

ツペルゲンガーだ。」

「……………声小つさ！……！！！」

「……………ちえ。」

電磁浮遊は、空気の圧力が低いところに行くほど、動きが鈍くなる欠点がある。

今は、かなり高い所に居るので、無論ライゼンの突進をかわす術など無かった。

電磁援護術、硬電磁膜を、簡単に突き破り、狭い電磁膜内の空間に紫苑はほとんど閉じ込められたようなものだった。

ライゼンは紫苑の腹を掌で圧迫するように殴り、その瞬間、何かが体内に侵入してきたような違和感を感じつつ、硬電磁膜を分解し、電磁浮遊を解除し、地面に向かって高速で飛ぶ。

地面すれすれになったところで魔力最大の電磁浮遊で浮かぶ。

飛行術を持たないライゼンは、勢いこそ殺したが、思いっきり地面に叩きつけられ、痛そうに起き上がった。

起き上がったときの顔は、満面の笑みだった。

爆笑する。

「あははっ！！はっはっはっは！！もうお前は一生魔術をまともに使えないく！！ぎゃはは」

言ってる意味が解らなかった。

ために電磁球を発動し、手に電気の球を作った。

……………作れる。

なんだ、アイツのハッターか。

と安心した瞬間――

魔術に、重みが無くなった。

！！！？？

魔力の圧力が消える。

それと同時にまぶたに沿って紫の紋章が浮き出る。

「あはは！ソレは、お前の体が俺のかわいい〜蟲ちゃんの住処になった証拠だよ！この蟲の名は……………」

ライゼンの指先についている2cm程の蟲が、空へ飛んだ。

「吸魔蟲（虫食い）っていうんだ！試しにその電気の球を解除してみなよ！面白いからさ〜」

紫苑は、警戒をしつつ、電気の球を割った。

瞬間

無数の蟲が、空中へ飛んだ。

！！

こ、こんな物が俺の体内に！？？

恐怖……………



ドクン

紫苑の体から魔力の波動が周期的に出る。

「そ、その魔力は何だよ!? 一体どこにそんな……………」

紫苑がおもむろに顔を上げ、ライゼンと視線が合った。

しかし、紫苑は目を閉じたままで……………ゆっくりと……………目が……………  
…開く。

バン!

ライゼンが吹き飛んだ。

「うああ〜! なんだよ、今の!？」

魔力の風……………

瞬きの間に、紫苑はライゼンの正面に移動し、魔力の波動で何度も

何度もライゼンを吹き飛ばしていく。

何十発も撃たれたライゼンはボロボロで、既に動ける状態では無かった。

そんな丸腰のライゼンに、なす術は無い…………

ゲームセットか…………誰もかそう思っただろう。

だが…………

バン!!

という音と共に、空に血が舞った。

そして、その血の持ち主が、膝を付いた。

「…………お前…………まさか…………」

「ふはっ！ふははははははは！……！」

ライゼンが高らかに笑う。

ガフ（魔神）化も解除され、蟲達が体から出るために中から開けた穴から、血がどくどくと流れる。

紫苑の周りには…………蟲が居た。

数え切れないほどの蟲。

それらが、ライゼンの目の前に集まり、竜を象った。

「こんなにピチピチするほど魔力を食べて……………満足かい？」

ライゼンが蟲達に聞く。

当然、返事は無かったが。

「まあいいや、こいつらを使って、魔力の少ないお前を殺すのは簡単……………」

ライゼンの体が竜を象った蟲に持っていかれる。

「お前ら！おい！食うのは俺じゃねー！おい！止める……………おい！！おい……………うわあ！！うわあああああああああ！！！！！！」

断末魔が天に響く。

竜の口から、血がぼたぼたたれた。

ライゼンが………食われた。

最早ライゼンよりも魔力が高くなった蟲達は、使い主を餌にしてしまった。

顔が、紫苑に向く。

紫苑は、ココまでか。と言って、雷で蟲を殺した。

蟲は低脳な為、紫苑の攻撃をかわす事は難しい。

勝者は、ライゼンが食われた瞬間に決まっていた。

そして、浪費した魔力を治そうと、リマジをバースから受け取る時に、注意を受けた。

「次の試合も〜きつとガフ化するだろう〜」

「ガフ化??」

「ああ、お前の未曾有の魔力は、ガフの部屋って言う呪術から来ているんだ。今は扉がゆるくなってる、開きやすいから、気をつける。ガフ化したら、止める様に審判に言うから。」

「あつ……はい。」

そして、決勝戦。

「うおーいーいいい!!とうとう決勝だ!!」

出場者の頂点はどっちだ?」

紫苑対くく亮!!!!レディイイイイ!!!!ファイッツ!!!!」

似た物……

純粋な人間の姿をしている2人には、差があつた。

なんとか決勝まで来た紫苑は、残り少ない魔力を搾り出して、亮と対峙する。

ポロポロで、苦しい表情の紫苑。無傷で、余裕の表情の亮。

大気が振動する。

速い動きで紫苑の背後に亮が回り込む。

反応し、後ろを向いた紫苑の腹に拳を一発入れた。

が、しかしその拳を掴み、引つ張った勢いで、顔に拳を叩き込んだが、亮は簡単にそれをかわし、もう一発パンチを喰らわす。

紫苑から、呻き声もれる。

電気を空気に伝わらせて亮を追い込むが……

「エアロバーン！」

両手から放たれる波動風でかき消され、魔力を消費した紫苑に一気に攻撃を喰らわせた。

「ぐっ!!！」

紫苑は電気を身に纏っているため、肉体的な被害は無い………が、心の中に入り込んでくる何か………

亮は、キャップを被りなおし、紫苑に手を掲げた。

「縛!!！」

無数の魔方陣が、紫苑の四肢を捕らえ、紫苑の動きが止まる。

力を入れても、全く動かない。

「お前……………今まで俺のかませ犬と、マグレな魔力増加のおかげで勝ち進んできたようだが、俺はそんなに甘くない。俺の魔法は呪術。4種類の呪術を操る。」

!?

紫苑は、AXELと、ランディーを思い出した。

2人とも、コイツの名を呼んで死んでいる……………そして、こいつはかませ犬って言ってる……………!

ピースが、揃った。

ゆっくりと歩み寄る亮。

「第一の呪術は、相手の動きを封じ込めることが出来る。  
第二の呪術は、対象を意のままに操る事が出来る。  
第三の呪術は、生命エネルギーか、魔力を搾り取る事が出来、そして、ソレは物に移転させる事が出来る。」

紫苑は、あの不気味な食べ物を思い出した。

亮は、呪術を発動する礎として、魔法を別の物に封じているのが魔力の量でわかる。

封じている間は、魔力が少ない。



亮は手を開き、握り締めた。

バキッゴキッ！ゴキッ！ゴキッ！

体があらゆる方向に捻じ曲がった。

紫苑は、既に風前の灯と化し、意識も朦朧としていた。

(クソ……………コイツ……………めちゃくちゃ強い……………なんで、なんでこんな強い奴と戦わなくちゃいけないんだよ……………もうブロンズランクは確定したじゃないか。)

亮が、薄ら笑いを浮かべながら歩み寄る。

「ククク。死んだか？」

亮が、紫苑の髪を引いて、顔を見た瞬間――

紫苑の右手が、亮の顔を握り、地面に叩きつけ……………

「あぐうあ!!！」

電撃を浴びせかける。

「な、なぜ動けるんだ!?!お前の生命はすでにズタズタのはず……………!!！」

「はぁーっ、っ、はぁーっ、っ、」

心乱……………

心乱……………

乱れる……………

心が……………乱れる……………

精神こころが……………乱れる……………

乱れて……………乱れた。

そして……………開く……………

封印されし魔神の部屋（ガフの部屋）が……………！

「っ！……！あああああああああああああ……！！……！！……！！」

「まっ、まずい……！！パンドラボックスが……！！」

バースが、顔を真っ青にして、試合を止める様に言った。

「ああなつた紫苑は、見境無く物を破壊するはず……………！！……！！」  
言いかけたそのとき。

時間が、歪んだ。

景色にひびが入り、折り重なっていく景色。

パツ、と進った光の先に、光り輝く紫苑の姿があった。

「なに………が………起きている………??」

亮も状況がわからないように、ア然としている。

紫苑に光が集束していく。その高密度な光の中に、大きな翼が生えた紫苑が居た。

残像が目に映る頃には、紫苑の姿は普通に戻っていた。

亮が、悟った。

「お前、能力ちからを使えるのか!？」

紫苑が、亮に向かって歩いて行く。

亮は、怯え、退く。

亮がいくら呪術を使っても、影響が無い。

「あ、、、あつ、、、、」

亮を壁の端まで追い込む。

紫苑が腕を振り上げる。

おぞましいほどの魔力。

漲る殺気。

亮は恐怖に怯え、腰が抜ける。

紫苑は、魔力を纏った手で、亮を押し潰そうとしたが、審判に止められる。

「相手は試合続行不可能です、これ以上の攻撃は認めません。」

紫苑は、審判をギロリと睨みつけ、光の槍を象り、放つ。

審判の頬を肉薄し、血が空に消える。

紫苑は光を纏った拳で審判を上を殴り上げ、瞬間的に上空に移動し、両手を合わせ、審判の頭に振り落とし、すごい勢いで下降していく途中に脇を捻り殴り、審判は高速回転しながら地面に頭が刺さる。

ガラッ 何事も無かったかのように頭を抜いて、紫苑を見た。

その後もずっと紫苑の猛攻をまともに喰らい続けた。

紫苑の光の刃が腕を吹き飛ばす。

紫苑が少し落ち着いていた頃、審判が自分の頭皮を掴み、一気にソレを剥がしたと思うと、体の皮ごと破け、そこに残った者は、無傷の昆虫族だった。

「我が名はヘラクネス。無死族だ。脱皮をすれば何度でも再生する事が出来る。」

なにをしてもムダで、亮に攻撃できないのを知ると、ふしゅうと言う音が体から出て、ガクツと膝を付いた。

とはいえ、この結果は明確だった。

勝者は……………紫苑。

客席が、おぞましいような表情と感動の表情が交差し、それぞれの向かった感情は、悦びだった。

客席が、歓声に包まれた。

1話 最終章 閉め忘れた鍵を閉め直します。く封印く（前書き）

今回はつまらないかも・・

## 1話 最終章 閉め忘れた鍵を閉め直します。〜封印〜

亮に勝って、晴れてブロンズランクに昇格できた紫苑は、暴走で、他人を襲ったとして審判に厳重注意を受けた後、バースの遠隔呪術抑制呪術を受けるため、カントサウスリーの地下にある大きな遺跡へ向かった。

名は

〜古の封印跡地〜  
アンティリウス

別名フロンテイス

1000を超える小部屋に分かれていて、一つだけ巨大な部屋があり、その部屋は大昔、超悪魔族の天辺に君臨していた、不死と言われていた魔族、ガリュウドレイズが封印されていると言われている。扉には、3つの鍵穴のような物があつて、ソレを開けないと、なにをしても開かないと言われている。

……とにかく、紫苑とバースはガフの部屋の扉を閉めなおすために、心鏡屋のおっさんから、呪術の術式を借りてきている。

紫苑を一部屋に入れると、強固に鍵を閉め、バースはあらかじめ呪術にかかるマーキング術を掛けているため、扉の向こうからでも、掛けたい呪術を的確に掛ける事が出来る。

封印は、ガフの部屋の奥にある鍵を取って、鍵を閉めるだけ。至っ

てシンプルだが、一旦扉を全開にするので、暴走化が確実なのである。

そして、準備が終わり、魔術を掛け始める。

バースが魔力体になり、紫苑の中に入る。そして、奥に眠るガフの扉を両手でこじ開ける。

部屋の初めに、大きな裂け目がある。

ソレは、自分の目的がはっきりしていて、堕ちた瞬間でも、恐怖に負け無ければ、自然と割れ目の向こうにたどり着ける。

紫苑に一気に魔神化が起こり、角が生える。

そして奥に入って行き、最深部に眠る鍵の前の扉を開けた瞬間、紫苑が暴れ出した。

「ヤ、ヤメロ！！ヤメロ！！！」

声が低く、重くなっていく。

悪魔の翼が生え、鋭い爪が伸びる。

「グガアアア！！！！！」

ガフが表に。そして封印部屋の破壊に入る。

壁を魔力の腕で壊しに掛かるが、特殊な防衛術が掛けられていて、

いくら崩しても元に戻る。

「グガアアアアアアア」

口から魔力の塊を壁に向かって放出し、その凄まじさに防衛術が破られそうになるが、危機一髪首の皮一枚つながって、再生に成功した。

「つぶね〜」

紫苑の様子が見えるバースから、冷たい汗が出ていた。

急いで閉め直さなくては……………と、バースは、鍵を手に取った瞬間

……………

紫苑が少なからず抑えていた魔力をも飲み込んで、ガフ化……………完全体へと急速に向かって行った。

こんなにも容易く、強力な紫苑の魔力を飲み込むとは……………ガフ……

……………やはりコレが三大呪術の中で一番強力か……………！

バースは、後悔した。こんなレベルの低い防衛術じゃ、ガフは止められない……………！

そう思った刹那、ガフの部屋からの帰りの道が確実な物となっていた。

何者かの魔力によるものだ……………だが、バースは誰だか解っていた。

「……………紫苑か？」

返事は無かったが、バーズは確信していた。

これは紫苑の手によるものだ。

覚悟を決めたバーズは、その道を走り出した。

……一方紫苑は、真っ暗闇で漆黒の空間の中に居た。

前までは、どれだけ遠くても、必ず光が差し込んでいた。

だが……今回は違った。

暗黒、ダークネス。

光すらない。自分の存在すら溶け込んで消えてしまいそうな圧倒的な孤独感の中、紫苑はバーズの名を呼んだ。

最後の望みだった。

返事は無い。

しかし、あきらめる事は無かった。

なぜなら……

バーズを……

信じてるから!!

道はより確実ではっきりした物になっていた。

バーズは、拳を強く握り、全力で駆けて行った。

見えた!!

出口だ!!!

バーズは、そこへ一心不乱で駆けた。

途中、奈落の割れ目があることも忘れて……

バーズは、裂け目に突っ込んでいった。

目的はある……それは、紫苑を助ける事……

そして、恐怖が裂け目の下へ引きずり込もうとするが、紫苑を助ける覚悟は強固な物で、恐怖がどんどん減っていき、最終的には、恐

怖が全て消え、裂け目の向こう岸に渡ることに成功した。

「やった……！紫苑……今行くからな……」

紫苑は、口から超高密度に魔力を練り、壁に放った。

脆く、簡単に大穴が開いた壁の淵に、紫苑は飛び乗った。

ギョロギョロと、周りを見渡し、再び魔力の弾を生み出す途中で、動きがピタリと止まり、呻いて、大きく倒れた。

「クソ……ガ……セツ……カク……デテこした……のに……」

徐々に紫苑の姿に戻り、完全に紫苑に戻った後、安心したようにすやすやと眠った。

そのころ、紫苑の扉の鍵を閉めなおしたバースは、魔力体になっていたバースは、本体に戻り、意識が確かになった途端、急いで紫苑の元へ急いだ。

「紫苑！！大丈夫か！？」

「バース……さん」

そう言って、幸せそうに眠り出すのを確認したバースは、たいした奴だよ。と一言。そして、背負って宿屋へ向かったのであった。

1話 最終章 閉め忘れた鍵を閉め直します。〜封印〜(後書き)

151

番外編 バーズの私情（前書き）

結婚フラグ。

## 番外編 バーズの私情

紫苑がいつも通っている宿屋は、「神の夢」と言う変わった名前前で、かなり総面積が広いので、個人の部屋も上等であった。

いつもと同じ様に、ふかふかな布団から、朝日を浴びて眼を覚ます。気持ちの良い、平和で、幸せな朝だ。

そして、いつもと同じ様に、隣で大柄な鳥獣族のバーズがガーガーと眠っ……………て、いなかった。

時間はまだかなり早く、地球時間とは、余り変わらないが、時間と言う5時だった。

アロハ ジェルと言う、口に含んで漱ぐだけで、歯磨きをしたよりもキレイになる薬品で、口をキレイにしたあと、廊下で若い頃、超剛力女と呼ばれていたガルジさんに朝の挨拶をし、外に飛び出した。

電磁探索で、バーズの特徴の鼓動を模索した。

すると、東に3分程と、案外近くに、バーズはいた。

おしゃれな店だった。

透明なガラスの先を探していると、バーズが居て、その向かいには、メスっぽい鳥獣族が居た。

バーズは、必死で何かを弁解しているようだったが、メスのほうはソレを許さないような態度だった。

すこし罪悪感があるが、電磁 振動捕取という、声や音を、独特の音波に変えて、聞くことが出来る、盗み聞きのような行為をした。

すると、大体話が読めてきた。

メスの名は、メリズ。バーン・特殊警部部隊と言うエリートでシルバランクとは別の特殊ランクのフレイムシードと言う第二番部隊の副隊長で、エリート中のエリートであった。ちなみに、特殊ランクは3段階あって、フレアシード、フレイムシード、ファイアシードの3段階に分かれていた。

そんなエリートが、旅人のバーズと人間で言う結婚する約束をしていたらしいが、カントサウスリーのどこにも居ず、散々探して、どこに行っていたかを問い詰められているようだった。

紫苑が聞いた中での話だが。

すると突然、バーズが頭痛いと訴え、今日のところは勘弁してもらったようだった。

店から逃げるようにして出てきたバーズに気づかれると面倒なので、急いで神の夢へと帰った。

それから、紫苑は電気の泡を生み出して、無邪気に遊んでいると、やつれた感じのバーズが宿に帰って来た。

「いや〜まいった。」

バーズは、ぶつぶつ同じ事ばかり復唱していた。

バーズは、クルサインという鹿に似た動物から取れる、美味で、香りも一級品の肉を焼いて、食べていた。

紫苑は、何となくさっきの話を言って見た。

「あの～さっきなを話して……」

「いや～まいった。」

「……………」

再び聞く。

「あの～……さっき店で……………」

「いや～まいった。」

「……………」

（な、なんだ！？話したくないのか！？）

「あの～……………」

「いやあ～まいった。」

（だ、ダメだ！！完全に故意的に受け流している！！地雷でも踏んだか！？いや！そんなはずは無い！！！）

紫苑は、必死で自分のことを励ました。

紫苑は、少し聞くタイミングをミスしたか………と思い、話しかけるのを控えてみた。

そして、いつも朝食を食べる時間帯に、紫苑が、お腹が空いた類の話をした途端、バースが口を開いた。

「あのな、旅を止めなけりやならねえかもしれねえんだ。」

（な、何故にこのタイミングで??）

バースが解らない……

とにかく、何も解らないフリをして、バースの話をただただ聞いた。

「俺が昔バーン・特殊警部部隊って言う所でメキメキ働いて居た頃な………同期で俺と同族の雌が居てな………ソイツと良くつるんだもんだ。そんでな………いやあ、まいった。」

バースの口が閉じた。

（!???なぜココで止める??）

紫苑は、この極度に思い空気に耐えられなくなり、外に出ようと、  
バースに断ろうとした途端、再び口を開いた。

「なんだか、ソイツが俺を好いてしまったようだったでな〜……」

(少し言葉が変だぞ!?)

「婚約を無理矢理……いやあ〜まいった。」

そして、また口が閉じた。

思い切って、紫苑は確信に迫った。

「なんで、そんな態度……結婚が嫌なんですか!?嫌だったら、  
彼女にちゃんと言えば良いじゃないですか!」

本当に思い切って、紫苑が言った。

少しの間が開いて、バースが言った。

「いや〜まいった。」

「……………」

「……………」

再び沈黙が訪れる。

紫苑は、かなり恥ずかしかった。かなり勇気を絞っていった言葉をこつもあつさり受け流されれば、ショックを受けるのも無理は無かった。

「いやあくまいった。」

バーズは、紫苑を見た。

紫苑は、かなりどきどきしていた。

(な、なんであんなに真剣に僕を見ているんだ！？こ、怖ええ……  
…ちくしょー！)

紫苑は頭の中の世界で自分の腹を掻っ切っていた。

しばらく紫苑を見た後、また下を向いて、あの台詞。

「いやあくまいった。」

軽い金縛りから解けた紫苑は、大きなため息を吐いた。

「旅に行くなら、別れようか……旅を止めて……うーん……まよった。」

「どうやら、バースもメリズのことを好きなようだが、紫苑との旅か、メリズとの結婚か、迷っているようだった。」

紫苑は、簡単に解決した。

「だったら、その人も一緒に旅に出れば良いじゃないですか!！」

「……いや…………まい…………」

(くそう!ダメだったか!!)

そう思ったが……意外な回答が……

「らない!!!それだ…………けど…………危険があるしな」

「どうやら、メリズの身を案じているようだった。」

紫苑が言った。

「僕が守りますよ。」

かっこつけて言った為少しギクッとした紫苑は、おどおどしながら

言った。

「あっ、あのっ、いまのは、その……」

紫苑は両手をピロピロ振ってあーだこーだ、言っていたが……

バースは、キラリと、歯を煌かせた。

「なーまいき良いやがって！メリズを守るのは俺だ〜！！」

こうして、バースとメリズの結婚が決まった。

紫苑の心の中で、いろいろと納得していた。

（なるほど。きっかけが欲しかっただけなんだな。）

そして結婚は5日ごとになった。

番外編 バーズの私情（後書き）

151

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9429n/>

---

レイティビア

2010年10月9日17時20分発行